

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

〔法政大学史学会〕大会講演要旨 中国史の眼で『魏志』倭人伝を読む

著者	金子 修一
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	59
ページ	58-64
発行年	2003-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10770

〈大会講演要旨〉

中国史の眼で『魏志』倭人伝を読む

金子修一

—

多くの先学が指摘しているが、『魏志』倭人伝（正確には『三国志』魏書東夷伝倭人條であるが、『魏志』の表記は史料にもあり、『魏志』倭人伝の表現も定着しているのこれに従う）が三国魏の立場で記されていることを忘れてはならない。西嶋定生氏は『魏志』倭人伝の字数を一九八三字とされたが、それに倣って『三国志』魏書の他の外国伝の字数を挙げると次のようになる。

夫余——七二五字、東沃沮——六七八字、挹婁——二七六字、濊——四七五字、韓——一四二七字（辰韓——一八字・弁辰三九九字・馬韓九一〇字）、烏丸——四六二二字、鮮卑——二二三〇字

多少の数え違いはあるであろうが、蜀書・呉書には外国伝がないので、『三国志』の外国伝では倭人伝の字数の最も多いことが確認できる。以後の中国の正史では、倭人伝や日本伝（『新唐書』以後）の字数は少なくなり、他の外国伝に比べて倭人伝の字数が最も多いのは『三国志』だけである。『魏志』倭人伝は、邪馬台

国までの里程記事や卑弥呼の様子など精彩に富んだ記述で知られるが、たまたま詳しい記録が残ったのではなく、倭に対する魏の強い関心があつてその記事が作成されたと推測できるのである。

この点は、魏と倭との遣使の回数及びその性格から確認することができる。倭国（邪馬台国）から魏への遣使は、景初三年（二三九）・正始四年（二四三）・正始八年（二四七）の卑弥呼の使者及び年次不明（正始八年以後間もなくか）の耆与の使者の計四回があり、そのうち正始八年以外の使者はすべて魏都の洛陽まで行つてゐた。また、魏から倭国（邪馬台国）への遣使は、正始元年の建中校尉（建忠校尉の誤記か）梯儻、正始八年以後の塞曹掾史張政の二回がある。いずれも帶方郡の属吏の派遣であるが、梯儻は卑弥呼を親魏倭王に仮授（拜仮）する制詔と「親魏倭王」金印とを持参した。張政は、難升米に仮授する黄幢とその旨を記した詔書とを持参したのみならず、卑弥呼の死後に立てられた耆与に対する檄文起草して、耆与を支持する魏の姿勢を明示した。彼等はいずれも魏の中央政府のために邪馬台国の王の地位を支

持、強化する働きをしているのであり、その役割は魏の朝廷の意向と堅く結びついていたと考えられる。前近代において、日本の君主が中国と比較的頻繁に使者を交わしたのは唐代までであるが、その中で十年ほどの間に日中で使者が数回ずつ往復した例は、この時以外には白村江の戦いの翌年以後の唐と日本との交渉があるばかりである。その時には、六六四年から六七二年までの九年間に唐の使者は五回ほど日本（倭）に来ており、回数から言えば魏と倭との交渉の時よりも多い。しかし、大半は唐の百済占領軍司令官たる百済鎮將劉仁願の使いであり、唐朝廷からの使者と解し得るのは六六七年の劉徳高のみである。これに対して、魏の邪馬台国への使節は回数こそ少ないが中央直結型であり、使者の役割は唐の場合に比べて遙かに重要であったと言えよう。

以上のように、『魏志』倭人伝すなわち『三国志』魏書東夷伝倭人條は、倭に対する魏の強い関心を示している点で、他の中国正史の倭人伝・日本伝とは相違している。このことを念頭に置いて、難升米・都市牛利派遣以後の魏と倭との交渉記事について、その特徴を述べていきたい。

二

卑弥呼から魏へ初めて派遣された難升米・都市牛利については、『魏志』倭人伝はこれを景初二年六月のこととするが、景初二年（二三八）が景初三年（二三九）の誤りであることは定説である。帯方郡は、三世紀初頭に遼東の公孫氏が建てた郡である。既に後漢末から自立していた公孫氏は、三国時代には江南の呉と

も交渉した。こうした状況に不安を抱いた魏が公孫氏の燕を滅ぼしたのが景初二年八月で、帯方郡はそれ以前は公孫氏の統治下にあった。難升米たちは帯方郡に至って天子に朝献することを求め、帯方郡の官吏に伴われて洛陽まで行っている。このような交渉は、景初三年六月段階ではあり得るが前年の六月ではあり得ず、難升米らの遣使は景初三年のことと考えられるのである。このことからすると、卑弥呼は朝鮮半島や中国の事情を逸早く把握していたことになるが、それは帯方郡が公孫氏の設置当初から倭や韓を管轄する役割を果たしていたからであろう（西嶋定生『倭韓これに属す』の解、同『倭国の出現』所収、東京大学出版会、一九九九年、初出は一九九四年）。帯方郡は魏と倭との交渉の窓口となり、『魏志』倭人伝に「郡」とあるのはすべて帯方郡を指すのである。

難升米らは景初三年のうちに洛陽に到り、一二月には卑弥呼を親魏倭王に任ずる「制詔親魏倭王卑弥呼」で始まる文書が發布された。「制詔」というのは、策書・制書・詔書・戒書という漢代の四種の公文書のうち、制書の書き出しの文言である（蔡邕『独断』）。つまり、卑弥呼は制書によって親魏倭王の称号を得たのであるが、漢制では「王」は策書によって任命されることになっているので、卑弥呼は漢制より一段階低い扱いで「王」に任命されたことになる。栗原朋信氏によれば、周辺諸民族の外臣は漢の国内の内臣に比べて一段階低い規格の印章を受けていた（文献にあらわれた秦漢璽印の研究）、同『秦漢史の研究』所収、吉川弘文館、一九六〇年）。そこで大庭脩氏は、卑弥呼の受けた制書

も漢代と同じく外臣を内臣より一段階低く扱う制度の適用である、と理解した(『親魏倭王』学生社、一九七一年、増補版、二〇〇一年)。これに対して杉本憲司・森博達両氏は、曹操を魏公に封ずる潘勗「冊魏公九錫文」(『文選』卷三五)に「制詔使持節丞相領冀州牧武平侯」とあることを指摘し、大庭氏の見解に疑問を呈した(『魏志』倭人伝を通読する)、森浩一編『日本の古代1倭人の登場』所収、中央公論社、一九八五年)。さらに、この文中には「授君印綬冊書」の一句もある。極めて多彩な国際関係を展開した唐代では、儀礼上外臣を内臣より一段階低く扱った徴証はなく、また漢代印章制度の理解に基づく栗原氏の内臣・外臣論にも再検討の余地はある(拙著『隋唐の国際秩序と東アジア』名著刊行会、二〇〇一年)。大庭氏の見解は大変興味深い、杉本・森両氏の指摘のごとく、これも再検討されるべきかも知れない。

卑弥呼の制書の内容は、親魏倭王とする任命書の前半部と魏の朝廷の賜物を列挙した後半部との二部から成っており、後半部はさらに卑弥呼の貢物に対する魏の回賜品と、有名な銅鏡百枚を含む特別な好物(良い物)の賜与との二種のリストに分かれている。唐代では任命書は告身と呼ばれるが、朝廷から異民族に贈るリストは別録などと呼ばれ、異民族に対する告身や国書とは別に作成される。卑弥呼の制書はこれらの内容が一つの文書に記されているのであり、国書の形式が整備されていく途上にあることが見てとれる。また、この制書と「親魏倭王」の金印とは装封しといった帯方太守に付されており、前述のように難升米の帰国に

同行した梯儻によって倭国に^{もたら}された。一方、回賜品や好物は装封して難升米・都市牛利に付されており、卑弥呼の制書の前半部に記されたものと後半部のものとの扱いには明らかに差がある。これは、「親魏倭王」の金印やその根拠となる制書を難升米らの使者に手渡した場合、その使者が身に付けて自ら親魏倭王となってしまうことを防ぐ用心を示したものであろう。当時の国際関係における印章の授与の仕方を示す、貴重な事例である。なお、卑弥呼の金印紫綬や難升米の黄幢は、いずれも「仮授」されている。「仮授」の語はこの頃の正史に多出するが、その定義は正史には記されていない。従って、「仮授」の内容を特定するのは些か困難であるが、「通常では与えられない者に特別に授与の資格を認める」意味に取れば概ね妥当な気がすると思う。その「特別に授与する」條件が、現実にはさまざまなものである。

親魏倭王の称号については、既に次のことが指摘されている。

卑弥呼がこの称号を受ける十年前の太和三年(二二九)二月、大月氏王波調(クシャーン朝のヴァースデーヴァ)が魏に遣使奉獻して親魏大月氏王の称号を得たが、異民族の王が「親魏某王」の称号を得たのは以上の二例に尽きる。ところが、『三国志』卷三三蜀書後主伝の裴松之註所引の『諸葛亮集』に拠れば、蜀の建興五年(二二七)三月の後主劉禪の詔に「涼州(甘粛省)の諸国王が月支(大月氏)や康居の胡侯數十人を伴って蜀に至り、蜀軍が北上して魏と戦う時には兵馬を率いてその先駆となることを申し出た」という意味のことが述べてある。すると、波調に対する大月氏王の授与は、こうした涼州や大月氏と蜀漢との連繫を察

知した魏が、大月氏と提携することによってその連繫を絶ち、西域諸国が蜀に助兵するのを牽制しようとしたもの、と推定される、そこで、卑弥呼に「親魏倭王」の称号を与えたことも、魏が倭国に対して同様の役割を期待した行為と解し得る。『魏志』倭人伝では、邪馬台国は会稽東冶の東、即ち今日の福建省福州市付近の東海上にあると認識されており、また魏の把握した邪馬台国以下の倭国の戸数の総計一五万余戸は、公孫氏の燕の四万戸を遙かに上回っていた。福州市は福建省の沿岸部、台湾の北西方向に当たり、その東の海上は呉の横腹の位置を占める。そこに倭国や邪馬台国があったと魏が誤認し、これに呉を牽制する役割を期待した、というのである（西嶋定生「親魏倭王冊封に至る東アジアの情勢」『西嶋定生東アジア史論集』第三巻所収、岩波書店、二〇〇二年、初出は一九七八年）。

このような遠交近攻の策は、三国の他の王朝にも見られる。蜀では、建興九年（二三一）に諸葛孔明が祁山（甘肅省礼県東北）を囲んだ時、北アジアにいる鮮卑の大人軻比能を招き、軻比能もこれに応じようとした。この連繫は結局実現しなかったが、同年（魏の太和五年）四月に軻比能は魏の幽州（北京市）に至って名馬を貢ぎ、魏は護匈奴中郎将を復置した。これは、魏の北側に位置する鮮卑に初め蜀が働きかけ、それを察知した魏も鮮卑に働きかけたものと考えられるが、四川の蜀が朔北で活動する鮮卑とも接触していたことは、注目されてよいであろう。一方、呉では黄龍二年（二三〇）に將軍の衛温・諸葛直が甲士万人と共に黄海上に派遣され、夷洲・亶洲の所在地を探索した。夷洲・亶洲は、秦

の始皇帝の時に蓬萊の神山と仙薬とを求めた徐福がたどり着いたという島で、蜃気楼現象からその伝承が生まれたとも言われる。従ってその探索は成功するべくもないが、それが呉の建国の翌年に行われたことに注目したい。

魏が二二〇年に建国すると、漢王朝の継承を唱えていた劉備はその翌年に蜀漢を建国した。ところが、孫権はその後長く魏に従属し、呉を建国したのは二二九年四月に至ってのことであった。そうなれば、当然魏と呉との関係は緊張する。衛温と諸葛直とは詔に違つて功無きことを理由に誅殺されたが、孫権が海上にロマンを追ったものとすれば、二人の処分は余りにも重い。建国による魏との対立を受けて孫権が協力勢力を海上に求め、その目的を果たせなかった二人が嚴罰に処せられたものと考えてよからう。彼らが甲士万人を率いていた事実も、夷洲・亶洲の探索が大規模な軍事行動に発展する要素を含んでいたことを示している。嘉禾元年（二三二）から呉は公孫氏との接触を開始し、公孫氏も応じたことが魏の公孫氏討滅につながったが、これは東方勢力との連繫の試みに失敗した孫権が、一転して魏の東北に接する公孫氏との接触を計ったものと解釈される。西嶋定生氏は、魏が倭国との交渉に当たって、邪馬台国の南にあってこれと不和の狗奴国と呉とが連繫することを恐れた可能性を考慮しているが、呉が建国後最初に東方海上に探索の手を伸ばしたところを見ると、以上の想定も魏にとっては案外切実なものであったのかも知れない。

三

話は前後するが、難升米らは魏に使いたし時に大夫と名乗っていた。『魏志』倭人伝の倭人の文身（入れ墨）の紹介記事の中には、「自古以來、其使詣中國、皆自稱大夫」という文があり、大夫は倭国の使者の中国における自称であった。中国では、春秋時代の諸侯の臣下は卿—大夫—士の階層に分かれており、古くから大夫は比較的地位の高い官人の称谓であった。難升米ら倭人の大夫も、地位の高い官人の意味で漠然と用いられた、と思われるかも知れない。しかし、『後漢書』百官志五、王国條「大夫」の本注には、「掌奉王使至京都、奉璧賀正月、及使諸國」とある。つまり、後漢の諸侯王の属官に大夫があり、郡国の使として上計して正月に皇帝に朝賀の挨拶をしたり、他の諸侯王の国に使者として遣わされたりした、という。倭国使の難升米らの役割も、この王国の大夫の役職に共通する。そこで、後漢の役割を知って倭国が自国の使者に大夫の称号を用いていたのだとすれば、倭国は同時代の中国の官職についてある程度理解していたことになる。さらに、諸侯王の属官としての大夫の称号を意図的に用いたとすれば、自らの地位を中国王朝の諸侯王に比定していたことになる。つまり、卑弥呼は自らを外臣に位置付けていたことになる。卑弥呼の意図をそこまで付度してよいか自信がないが、後漢以降の倭国が漢字の読解を通してある程度中国の文化を把握していたことは、想定してもよいのではなからうか。

正始元年（二四〇）の難升米・都市牛利の帰国の際には、前述

のように梯儻が同行して卑弥呼を倭王に拝仮した。拝仮とは、仮授の拝受者側の表現であろう。これに対して、倭王となった卑弥呼は帰国する梯儻に上表文を托し、詔恩に答謝した。次いで正始四年（二四三）に、大夫伊声耆・掖邪狗ら八人が遣使され、生口・倭錦等を献上して率善中郎將の印綬を^{いせ}一拝した、一拝とは全員揃っての意味である。正始六年には詔して難升米に黄幢が賜与され、「郡に付して仮授」、すなわち帯方郡經由で手渡されることになった。幢とは釣鐘のように中空の円い軍旗で、孫権が燕王に任じた公孫淵に与えたり、鮮卑の軻比能に対立して青龍元年（二三三）に魏に來降した泄帰泥に、明帝が婦義王に拝すると共に賜わったりしている。このように、三国時代の幢は戦略上重要な人物に与えられているが、右の鮮卑の泄帰泥を除けば異民族で与えられたのは難升米ただ一人であり、しかもそれは魏の土徳を示す黄色の幢であった（栗原朋信『魏志』倭人伝にみえる邪馬台国をめぐる国際関係の一面）、同『上代日本対外関係の研究』所収、吉川弘文館、一九七八年、初出は一九六四年）。帯方郡の使者によって齎されたことも、黄幢の賜与がそれだけ重要であったことを意味する。ただ、それがなぜ倭の遣使のない正始六年に賜与されることになったかは疑問である。栗原朋信氏は、倭と連繫して半島の韓族を制圧することを魏が企てて用意したのが、後に匈奴国対策に転用されたとするが、或いは伊声耆らの遣使の際に卑弥呼の方から要望していたものかも知れない。

正始八年（二四七）になると、卑弥呼は載斯烏越らを遣し、南の匈奴国と交戦状態にあることを訴えた。帯方郡では塞曹掾史張

政を遣し、張政は黃幢賜与のことを述べた詔書と黃幢とを難升米に拝仮すると共に、檄を作って告諭した。檄とは軍を起こす際に当に用いられる趣意書で、張政は邪馬台国と狗奴国との抗争に当たって、檄によって魏の邪馬台国支持の姿勢を明示したのである。黃幢が詔書とセットで齎されたのは、卑弥呼に対する親魏倭王の金印授与の場合と同じであり、黃幢の重要性はこの点にもよく示されている。ところが、張政が邪馬台国に着いた時には卑弥呼は死去していた。『魏志』倭人伝には「卑弥呼以死」とあり、この「以」を「もって」即ち「そこで」の意味に解すれば、張政が到着してから卑弥呼は死去したことになる。しかし、『漢書』匈奴伝上元鳳二年（前七九）條には、

是時衛律已死。衛律在時、常言和親之利、匈奴不信。及死後、兵數困、國益貧。

とある。この「以死」は、文脈から同音の已の意味に取り、「是の時衛律は以に死んでいた」と解釈すべきである。「卑弥呼以死」の「以」も、同様に「すでに」の意味に解すべきであろう。つまり、張政は難升米に黃幢を渡すことはできたが、その時には卑弥呼は既に死去していたのである。

周知の如く、その後に男王が立ったが国中が服さず、千人以上が殺される事態に至った。そこで、卑弥呼一族の一三歳の少女菟与が立つと国中が安定した。この時、張政が檄を作って菟与に告諭し、魏王朝の支持を明示したことは初めに述べた通りである。菟与は掖邪狗ら二十人を派遣して張政らを送り還し、掖邪狗らはさらに洛陽まで至って男女生口三十人、異文雜錦二十四等を献上

中国史の眼で『魏志』倭人伝を読む（金子）

した。ここで注目されるのは、『魏志』倭人伝に掖邪狗が「倭大夫率善中郎将」と記されていることである。倭から魏に派遣された使節のうち、二度派遣されたのは掖邪狗だけであり、彼は正始四年の遣使の際に率善中郎将の印綬を受けていた。当時の公印は身分証明書の役割を果たしていたが、二度目の遣使の際に掖邪狗が率善中郎将と呼ばれているのは、初回に受けたその印綬を持参したからであろう。魏から受けた印綬を見せることによって、今回の使節は洛陽までスムーズに旅行できたものと推測される。西嶋定生氏は、漢字が中国王朝との外交交渉の必要性から周辺諸国に伝播していったことを強調されたが、掖邪狗が二度目の遣使で率善中郎将を名乗ったのもその一例とすることができよう（前掲拙著所収「倭人と漢字」、初出は一九九九年）。そうすると、掖邪狗の肩書きに「倭大夫」とあるのも、「倭の自称では大夫」の意味で用いられているのではなからうか。正始四年の時には、伊声耆・掖邪狗の肩書きは大夫のみであった。この度は、その下の率善中郎将が魏にとって掖邪狗の正式の称号であったのであろう。

西嶋氏は、前掲『倭国の出現』の絶筆となった「あとがき」で、『魏志』倭人伝が邪馬台国を記すための文献ではなく、卑弥呼も決して邪馬台国の女王とは記されていないことを強調しておられる。おそらく西嶋氏は、魏が関心を持っていたのは、魏と連繫しようとして遣使した倭国とその王としての卑弥呼であった、と言いたかったであろう。この点を念頭に置くと、注意されるのは『魏志』倭人伝における邪馬台国や卑弥呼の表記である。実は、同伝中の「邪馬台国」の表記は最初の一回だけで、そこで

「女王の都する所」と説明されると、あとは「女王国」と記される。中国では、唐の則天武后が史上唯一の女性皇帝である。卑弥呼が女性であったことが魏の関心を惹き、そこで以後の邪馬台国の表記は女王国となったのであろう。卑弥呼についても、その表記が見えるのは彼女の共立を伝えた記事と、親魏倭王に任ずる制書の冒頭との二箇所のみであり、それ以外はほとんど「女王」と記されている。しかし、右の制書のあとは四回のうち三回まで「倭王」と表記され、「倭王」の表記はこの制書以前にはない。つまり、魏は卑弥呼を親魏倭王に任じたあとに倭王と呼ぶに至ったのであり、この点は掖邪狗の率善中郎将の表記に類似する。異民族に対する魏の官職授与は、厳格に運用されていたのである。

四

私は本年『西嶋定生東アジア史論集』（全五巻、岩波書店、二〇〇二年）の編集に参画したが、晩年の西嶋氏が倭国の問題に積極的に取り組まれていたことをあらためて実感した。今回の講演では、氏の提言を受けて私なりに考えた『魏志』倭人伝の諸特徴を中心に述べることにした。『魏志』倭人伝が中国で、中国の論理を以て書かれた史料であることは御理解頂けたかと思う。ただ、準備期間や紙数の関係もあって、他の多くの研究者の業績に触れることはできなかった。その点、御海容頂ければ幸いである。